

「ネイティヴィズムの再燃」論争をめぐって：多文化社会の「ナショナル・アイデンティティ」

山中，亜紀
西南学院大学

<https://doi.org/10.15017/7579>

出版情報：法政研究. 72 (2), pp.31-61, 2005-11-29. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

「ネイティブイズムの再燃」論争をめぐる

——多文化社会の「ナショナル・アイデンティティ」

山中亜紀

はじめに

一節 「多元化」の時代——「ヒスパニック・パワーの台頭」の背景

二節 アメリカの「断層線」

三節 アメリカの「文化的な混濁性」

四節 「統合」への視座——ナショナルリズムとしてのネイティブイズム

むすびにかえて

はじめに

周知のように、近年、アメリカ合衆国（以下アメリカと略記）では、「ヒスパニック」とよばれる人々が急増している。^① 彼らは、隣国メキシコやキューバなどから、移民として合法あるいは非合法にアメリカに渡ってきた人々である。彼らの流入は、二〇世紀半ばごろから徐々に目立ち始め、二一世紀にはいつても衰える気配はない。^② ヒスパニックは、アメリカ社会において次第に大きな存在となりつつある。もちろんそれは、総人口に占めるヒスパニック人口の割合が増えたことのみ起因するものではない。とくに一九九〇年代以降さかんに喧伝されるようになった、いわゆる「ヒスパニック・パワーの台頭」といわれる現象は、サブ・カルチャーを重視する、近年の「多文化主義的」な政治社会風潮を抜きにして、理解することはできない。のちに触れるように、一九六〇年代以降の「エスニック・リバイバル」のなかで、さまざまなマイノリティ集団・エスニック集団は、各集団固有の文化を堅持することの重要性を主張するようになった。彼らの展開した社会運動に呼応して、「差異」の尊重にたいする社会的関心も高まり、「アフアーマティブ・アクション」や二言語教育法といった諸政策、あるいは「エスニック・スタディーズ」の発展がもたらされた。現在、アメリカで暮らすヒスパニック住民が、ヒスパニック集団としての権利や尊厳の平等を求めてさまざまな活動を展開する一方、有識者がヒスパニック文化の発展を賞揚したり、企業経営者や政治家が、ヒスパニックの労働力や政治的影響力を活用すべく、彼らの文化的背景に配慮した対応をおこなったりしている状況は、そうした一連の流れのなかで理解する必要がある。^③

その一方で、「ヒスパニック・パワー」を好ましくからぬものとして、抑制しようとする動きがあることも、また事実である。ラテン・アメリカからの移民や、かれらとエスニシティを同じくする住民たちにたいする反感は、日常生活レベルでの差別や暴力的威嚇として表出するにとどまらず、不法就労者の摘発強化や、「非合法移民」の本国送還政策、

あるいはラテン・アメリカとの国境地帯における警備の強化といった形でも、表現されている。こうした社会的政治的現象、すなわち、ヒスパニック人口の増加を否定的にとらえ、「ヒスパニック・パワー」を抑制しようとする動きは、アメリカ国内においては、しばしば「ネイティヴィズム」(nativism)と批判的に評せられている。本来、ネイティヴィズムとは、一九世紀中葉におこった、「反移民的」(anti-immigrant)な政治運動や社会風潮を指し示す、歴史的な概念である。そうした用語が、現状を分析するにあたって用いられているということは、ヒスパニックに向けられた反感が、現代特有の事象としてではなく、アメリカにおいて繰り返されてきた、移民や有色人種を対象とする排他的な運動の一部として、位置づけられていることを示唆している。法定移民数削減を主眼とする一九九七年の入国管理制度改革を報じた *New York Times* 紙の次の言葉は、そうした一般的理解を端的にあらわしたものだといえよう——「アメリカ合衆国は、名高い移民国家であると同時に、ネイティヴィズムを特徴とする国でもある。この傾向は、少なくとも一八五〇年代に反カトリック・反移民を主張した、ノー・ナッシング党 (Know Nothing) にまで遡ることが出来る。……入国管理制度改革委員会の方針は、もし不注意に用いられれば、アメリカ人が移民に接するさいの最悪の態度を〔またしても〕喚起することになる。〔すなわち〕移民のことを内心では快く思っていない議員たちを勢いづけ、ネイティヴィズムを煽ることになるであろう。移民たたく (bashing immigrants) は……〔これまでも〕性質の悪い政治活動 (bad politics) を生み出してきた」(角括弧内は筆者による補足)。

ヒスパニックの流入を何らかのかたちで規制する必要があると考える論者のなかには、みずからの主張が「ネイティヴィズム」と一蹴される現状に、不満の声をあげる者がいる。たとえば、保守系雑誌 *National Review* の編集者ブリメロー (Peter Brimelow) である。彼は一九九五年に出版した自著の冒頭で「『あいつは』ネイティヴィストだ!」、この魔法の言葉 (magic word) は、現在の移民政策について敢えて苦言を呈する者が、つねに浴びせられることになる……悪魔払いの呪文 (exorcist's spell) である」(角括弧内は筆者による補足) と述べ、「移民問題」を議論の俎上に

のせることがタブーになっている現状に憤りを露わにしている。⁵⁾とはいえ、彼は、「ネイティブリスト」と呼ばれること、それ自体を拒絶しているのではない。そのことは、ブリメローの次の言葉に如実にあらわれている——「熱狂的移民ファン (immigration enthusiasts) の連中は、ネイティブリストのことを、ポグロムにかかわった反ユダヤ主義者と同類であるかのように考えている。……〔しかし一九世紀の〕ネイティブリストは、けつしてナチス〔のような人々〕ではなかつた。彼らは、文化的意味においても、政治的意味においても、ナシヨナリストだつたのだ。……〔したがって〕その系譜をひく現代のネイティブリストたちが、先人のおこないを恥じる必要はまったくないのだ」⁶⁾(強調は原文のまま、角括弧内は筆者による補足)。つまりブリメローは、「移民問題」についての彼の議論を一顧だにしようとしない人々に憤慨しているばかりでなく、「ネイティブイズム」が曲解されていることにも不満を抱いているのである。それというのも、のちに詳論するように、ブリメローの認識においては、「ネイティブイズム」は、ナシヨナリズムと目的において通底しており、その意味において、積極的意義をもつからである。

以上のことから明らかなように、「ネイティブイズム」あるいは「ネイティブリスト」という言葉は、多義性をおびていて、論者や文脈によって、その意味内容が錯綜しているといつてよいだろう。議論を先取りして概括すれば、一方では、一九九〇年代以降、「ヒスパニック・パワー」の抑制を企図しているように思われる暴力的な示威行動、あるいは政治活動や言論活動が盛んになるにしたがつて、こうした現状を、一九世紀中葉に「移民たたき」がおこつたことになぞらえて、つまり、「ネイティブイズムの再燃」として、とらえようとする立場がある。こうした立場をとる人々にとって、「ネイティブイズム」は、「多文化国家」アメリカが克服すべき課題にほかならない。他方、ヒスパニックの急増がアメリカ社会におよぼしている「好ましからぬ影響」を憂慮する人々は、自己の主張が、二重の意味で誤解されていることに、義憤を感じている。ひとつには、ヒスパニック移民にかかわる彼らの問題提起が、「ネイティブリスト」というレッテルによって、不当に貶められていること、もうひとつは、ネイティブイズムという概念が、曲解されてい

ることである。彼らのみるところでは、「ネイティヴィズム」それ自体は、「動揺」するアメリカ人の「ナショナル・アイデンティティ」を再構築し、「アメリカの分裂」を回避するための、ひとつの手がかりともなりうるものであって、ヒスパニックにたいする暴力的抑圧を容認したり正当化したりするものではない。このように、現在もちいられている「ネイティヴィズム」という用語には、ふたつの相反する内容が包含されているのである。

にもかかわらず、その多義性がさほど意識されないまま、現在の「移民問題」論争において用いられているため、ときに議論を理解する妨げともなっている。さらに日本においては、*nativism* にはいまだ確立された邦訳がなく、近年は特にそのままカタカナ表記されることも多いため、論争の内容を正確に把握することはいつそう困難な状況にある⁽⁷⁾。この論争を、そしてそこにおける対立の図式を、どのように理解すればいいのであろうか。

ひとつの手がかりは、アメリカ政治研究者の古矢旬による分析である。彼は、「多文化主義」の勃興にとまって先鋭化している対抗関係について、次のように説明している——「その一つは、政治権力をめぐる対立である。……保守的ナショナルリストと急進的マルティカルチュラリストとの論争は、究極的にはあるべきアメリカ像をめぐるイデオロギー対立にほかならなかった。それは文化資本のみならず経済資本の奪いあい⁽⁸⁾を、そしてそれらの資本の配分にあずかる政治権力の争奪戦をもふくむ和解不能の全面的対立であった⁽⁸⁾」。この解釈は、ネイティヴィズムをネガティブなものとして語る論者と、ポジティブなものとして語る論者との論争を読み解くうえでも、有効なのであろうか。それを確かめるためにも、本論文では、二〇世紀末の「ネイティヴィズムの再燃」と、それをめぐる議論状況を整理することにした。この作業をつうじて、「ヒスパニック・パワー」の評価をめぐる、互いを「熱狂的移民ファン」、「ネイティヴィスト」と痛罵しあう論者たちの対立の背後にある、アメリカの「ナショナル・アイデンティティ」についての、より根源的な見解の相違を析出することができるであろう。まず一節では、論争の直接的契機となった「ヒスパニック・パワーの台頭」が、「多様性」を重んじる昨今の政治社会風潮と密接に関連していることに

鑑み、一九九〇年代に「多文化主義」が隆盛するまでの経緯を瞥見しておきたい。なお、以下の行論中、引用箇所における傍点は原文における強調を、丸括弧は原文にある補足を、亀甲括弧は筆者による補足を、意味する。

一節 「多元化」の時代——「ヒスパニック・パワーの台頭」の背景

いうまでもなく、「多文化主義」(multiculturalism)をめぐる議論は、いまだ極めて錯綜した状態にあり、「多文化主義者」を自称する者、あるいはそのように他称される者の間であつても、論者ごとに見解の相違が目立つ⁹⁾。また、そうした錯綜状態は、「多文化主義」を批判する側にも共通してみられる現象であり、いまだ論争の渦中にあるといえる。「多文化主義」について詳細かつ正確に記述することは、非常に困難である。その点を踏まえ、本節では、論争にはあえて言及せず、一九九〇年代以降における「多文化主義の勃興」にいたるまでの歴史的流れを、概略的におさえておくことにしたい¹⁰⁾。

第二次世界大戦を経た一九五〇年代のアメリカは、経済繁栄と冷戦が生み出した国民的一体感に覆われており、極めて安定した統合状態にあった。ただし、この時代の統合は、黒人や、「帰化不能外国人」たるアジア系マイノリティ集団といった「見えざる人々」を国民統合から排除することによって、かろうじて実現していたにすぎなかった。また、ワスプ(WASP)という主流文化の存在を前提とし、それへの同調や同化が自明視されていたことも、一九五〇年代が「アメリカ国民がもっとも統合されていた」時代と一部で目される由縁である¹¹⁾。こうした統合認識に転換をせまる端緒となったのが、一九六〇年代半ば以降の「公民権運動」であった。「人種統合」という黒人の要求は、黒人同様それまでの国民統合から排除されてきた多様なマイノリティ集団にも、刺激を与えずにはおかなかつた。一九六五年に移民法が改正され、一九二四年以来続けられてきた、人種やエスニシティにもとづく差別的な移民選別方式が改められた

のも、そのひとつの結果といえよう。とはいえ、六〇年代における「人種統合」の目的は、かつての「見えざる国民」を可視化し、同化することにとどまっていた。そこではまだ、人種やエスニシティという「アイデンティティ集団」は、やがて解消すべき非永続的なものとして、措置されていたのである。¹²⁾

しかし、「公民権体制」のもとで、さまざまなマイノリティ集団・エスニック集団の統合が、政治的・行政的手段をもちいて達成すべき目標となるのにもなつて、「各エスニック集団のアイデンティティを追求する様々な分野の文化運動」が活性化し、やがては「ルーツ現象」へとつながっていく。¹³⁾「エスニック・リバイバル」が叫ばれ、多様な「アイデンティティ集団」が、各集団固有の文化や歴史を重んじ保持することの重要性を主張するようになった。彼らの展開した社会運動に呼応して、「差異」の尊重と差別の克服にたいする社会的関心も高まり、一九七〇年代以降の、「アフーマティブ・アクション」や二言語教育法といった諸政策、あるいは「エスニック・スタディーズ」の発展がもたらされたのである。

こうして、六〇年代から七〇年代にかけて、「きわめて広範で全国的な集団間関係の地殻変動」¹⁴⁾がおこったのであるが、にもかかわらず、そこには「隔離」や「差別」が執拗に残存しつづけていた。差別撤廃のための現実的施策が満足な成果へと結びつかないことに、マイノリティ集団・エスニック集団は苛立ちを強めた。次第に彼らは、「等しい権利」を獲得するためには、まずなによりも「等しい敬意と尊厳」を勝ち取る必要があると考えるようになる。その帰結こそ、八〇年代後半から九〇年代にかけての「多文化主義の勃興」にほかならない、と古矢はいう——「黒人……を先頭とし、新しい移民たちを随伴者とする、この集団間の意識における対等性をめぐる戦線において、これら被差別者たちは、まづみずからの集団意識の動員と強化をはからなければならぬ。彼らにとって何よりも重要な武器となるのは、強固な集団的アイデンティティである。それゆえ、マルティカルチャーリズムの勃興にあいともない、いわゆるアイデンティティ・ポリテイクスが登場する……そこにおいては、集団間の交流や相互浸透や、ましてや融合、同化は否定的価値と

目されるほかない⁽¹⁵⁾」。

いうまでもなく、この「戦線」における「随伴者」のひとりがヒスパニックであった。彼らは、低賃金の単純労働を足がかりに、着実に経済力を身につける一方で、独自の文化にもとづく生活スタイルをアメリカにおいても築き上げようとしている。いまやヒスパニックが、文化的政治的に「利用可能な存在」であることに、疑いの余地はない。かくして、「ヒスパニック・パワー」がもてはやされるようになった。そして、それと時を同じくして、ヒスパニックを対象とする「移民たたき」も高まってきたのである。

二節 アメリカの「断層線」

「ヒスパニック・パワー」を牽制する試みとして、よく知られている事例は、一九九四年にカルフォルニア州民により発議された住民提案一八七 (Proposition 187) であろう。この提案は、「非合法移民」への公共サービスの停止をかけたもので、州民投票で過半数を獲得した⁽¹⁶⁾。こうした政策レベルでの動きに加えて、移民規制を主たる内容とする言論活動もきわめて盛んである。著名な論者を紹介しておこう。先に触れたブリメローによれば、大量の移民を受け入れることは、「アメリカ人のあいだで共有するものは何もないという意味において……アメリカをついにはよそよそしい国 (an alien nation) にしてしまう⁽¹⁷⁾」ことにほかならず、それを回避するには、現行の移民法を破棄し、移民流入を「適正な」レベルに戻すべきであるという⁽¹⁸⁾。元共和党大統領候補のブキャナン (Patrick J. Buchanan) は、著書 *The Death of the West: How Dying Populations and Immigrant Invasions Imperil Our Country and Civilization* (邦訳『病むアメリカ、滅びゆく西洋』の冒頭に、彼が二〇〇〇年の大統領キャンペーン中に繰り返かえし耳にしたという人々の嘆き——「パット、私たちの生まれ育った国は失われつつあるよ」を掲げ、「歴史上、これほどの短期間で、これほ

ど重大な人口構成の変化をくりぬけ、そのまま一つの国として存続しえた国家はない……制御不能な移民の増加はアメリカを分解の脅威にさらし、国民は、共通の価値観……をほとんど持たない「人々からなる」ただの寄せ集めの集団に変わろうとしている」と警告している⁽¹⁹⁾。そのうえで彼は、ヒスパニック人口の増加をメキシコ人によるレコンキスタ運動の一環と位置づけ、移民への警戒を国民に呼びかけるのである⁽²⁰⁾。「移民の弊害」(immigration disaster)を危惧しているのは、ジャーナリストや政治家ばかりではない。著名な歴史家シュレジンガー二世(Arthur M. Schlesinger, Jr.)は、一九九一年、黒人による「アフリカ中心主義」(Afrocentricity)にくわえて、ヒスパニック移民による二言語併用運動が、アメリカを分解させつつあると警告し、著書*The Disuniting of America: Reflections on a Multicultural Society*(邦訳『アメリカの分裂』)を発表した⁽²¹⁾。また、国際政治学者ハンチントン(Samuel P. Huntington)は、つい先ごろ二〇〇四年に上梓した*Who are We?: The Challenges to America's National Identity*(邦訳『分断されるアメリカ』)において、「二分化されたアメリカ」、すなわち「スペイン語と英語という二つの言語と、アングロプロテスタントとヒスパニックという二つの文化」に分断されたアメリカが現実のものとなりつつあるという憂慮を表明している⁽²²⁾。

シュレジンガー二世やハンチントンの議論に、多少なりとも学術的装いが施されているのにたいして、ジャーナリストであるブリメローや政治家であるブキャナンの論調はより扇情的で直裁といえる。議論の重点や移民政策にかんする具体的な提言についても、見解の相違がないわけではない。しかし、根源的な危機意識は、彼らに共有されていると云ってよいだろう。それは、ヒスパニック文化に「固執する」移民の流入によって、アメリカに暮らす人々の自己認識が変化し、人々が、アメリカ国民であることを第一義とする自己認識のありよう、つまり「ナショナル・アイデンティティ」を喪失しつつあるという強い危機感である。とりわけハンチントンは、著書にふされた副題——「アメリカのナショナル・アイデンティティにたいする挑戦」——が示すとおり、「ナショナル・アイデンティティ」の問題に焦点をあ

てた議論を展開しているので、ここでは代表して、彼の危機意識を抽出しておこう。⁽²³⁾

ハンチントン自身の言によれば、著書 *Who are We?* の目的は、「アメリカ人のナショナル・アイデンティティの『顕著さ』とその『実体』に生じつつある変化」を詳らかにすることである。⁽²⁴⁾ まず「顕著さ」であるが、これはアメリカ人の「ナショナル・アイデンティティ」を構成する四つの要素によって成立している。すなわち、白人という「人種」、イギリス人という「エスニシティ」、アングロ・プロテスタントの「文化」、そして政治的原則にかんする「信条」である。なかでも、とりわけ重要な役割を果たしてきたのは、アングロ・プロテスタントの「入植者」がつくりだした「文化」であり、この「文化」は、「入植者」に続いてアメリカを訪れた「何世代もの移民」にも吸収され、その結果アメリカの「信条」が生み出されたのであった。⁽²⁵⁾ アメリカ人の「ナショナル・アイデンティティ」は、史上長らく、四つの要素すべてによって構成されてきたのだが、二一世紀初頭の現在、その「実体」は、大きく様変わりしている。まず「エスニシティ」については、二〇世紀中葉までに、いわゆる「新移民」の同化が進んだことによって、構成要素として成立しなくなり、次に「人種」にかんしても、第二次世界大戦後の公民権運動をへて「問題にされなくなった」。⁽²⁶⁾ 自由や平等、民主主義といった「信条」は、いまだ有用であるものの、冷戦後は旧社会主義諸国でも支持されるようになり、アメリカ人独自の「ナショナル・アイデンティティ」を構成する要素とはいいがたい状況にある。⁽²⁷⁾ さらに近年は、アングロ・プロテスタントという「文化」までもが揺らぎ始めている。いまやアメリカは「二つの公用語を持つアングロ／ヒスパニックの社会へと変貌する可能性」に直面している。「文化的な二分傾向」は、ひとつには「知識人とエリート」のあいだで多文化主義と多様性の原則がもてはやされた結果」であり、「こうした原則を促進し承認した二言語教育にかかわる政府の施策とアフアーマティブ・アクションの結果」であるが、この傾向をさらに推し進める原動力となったのは「中南米からの移民……とりわけメキシコからの移住者」であるという。⁽²⁸⁾ こうして、「三世紀以上の月日を費やして醸成されたアメリカ人の『ナショナル』アイデンティティは解体し、〔代わって〕サブナショナル・アイデン

テイティが優越するよう促がされた」というのが、ハンチントンの認識である⁽²⁹⁾。では、この現状をまえにして、今後アメリカはどうすべきなのか。ハンチントンの主張は明快そのものだ。キリスト教信仰、より正確にいえばプロテスタントイイズムを梃子に、アングロ・サクソンの伝統と文化を再興し、「自分たちのナショナル・アイデンティティと、国としての目的」を再認識する⁽³⁰⁾のである。

こうしたハンチントンの主張にたいして、知識人たちの反応は、概して冷ややかである。New York Times紙の書評記者、カクタニ (Michiko KAKUTANI) は、二〇〇四年五月二八日付の記事において、ヒスパニック移民の継続的流入と彼らの同化傾向の低さがアメリカにおよぼす「悪影響」についてハンチントンが論じた第九章「メキシコ移民とヒスパニック化」を、「本書のなかでも、もつとも人騒がせな一章 (most alarmist chapter)」と評している⁽³¹⁾。そのうえで、カクタニは、総体的に見ても「Who are We? は、「ハンチントンの代表的著作」The Clash of Civilizations〔邦訳『文明の衝突』〕のように物議をかもし書となることをめざしたのであるが、結果的には移民や宗教、そしてワスプ文化に関するおなじみの議論に、敵意にみちた新解釈 (a bellicose new spin) を加えて、焼きなおしただけにすぎない」と一蹴している。ジャーナリストであるチェトキン (Anton Chaitkin) の批判も辛辣である。チェトキンによれば、本書のタイトルである「われわれとは誰か?」という問いにたいして、ハンチントンが読者に打ち明けた「秘密の答え」とは、「〔われわれとは〕かつてアメリカ人の〔ナショナル・〕アイデンティティを定義するのを助けてきた数多くの排他的な人種運動や反外国人運動の伝承者」にほかならず、その真意は「彼が打ち出した新たな敵のイメージ、すなわちヒスパニック、とりわけメキシコ系移民にたいする恐怖と憎悪を駆り立てて、白人によるネイティヴィズム運動 (white nativist movement) を押し進める」⁽³²⁾ことにあるという。

ハンチントンの主張とそれに向けられた批判は、アメリカにおける「ナショナル・アイデンティティ」をめぐるひとつの議論状況を端的に表わしている。すなわち、一方の側は、かつてない規模で押し寄せるヒスパニック移民によって、

アメリカ人の間に言語文化等における「断層線」(Fault line)が生じ、「ナショナル・アイデンティティ」は「危機」的状态にあると憂慮している。他方、こうした現状分析に批判的な人々は、対立陣営の憂慮を、国民の文化的多様性を抑圧しようとする、偏狭な「ネイティブイズム」にもとづくものとして非難する⁽³³⁾。後者を代表するのが、アメリカ移民史研究者サンチェス (George J. Sanchez) である。彼は、前述した提案一八七や、ブリメローとブキャナンの言動、あるいは一九九二年のロサンゼルス暴動などの政治・社会的現象をとらえて、「この国は一九二〇年代以降もつとも大規模なネイティブイズムの再燃に直面している」と断言する⁽³⁴⁾。では、サンチェスはこれらの問題をどのように論じているのだろうか。次節で詳しくみていくことにしよう。

三節 アメリカの「文化的な混濁性」

サンチェスは、「ネイティブイズム」が一九九〇年代に「再燃」した歴史的背景にかんして、次のように説明している——「一九六五年以降……経済再構築 (economic restructuring) が本格的にすすむなか、われわれは、防御的なナショナリズム〔の勃興〕を〔二〇世紀初頭に続いて〕再びまのあたりにしている。……われわれが現在目になっているのは、急速な脱工業化、サービス・ハイテク経済 (a service and high tech economy) の台頭、そして国内の職場を守るうとする労働組合の努力を骨抜きにする世界的規模での資本移動である。こうした経済的構造変化 (economic transformation) は……確実にアメリカ合衆国の中心諸都市の基盤を蝕み、ネイティブイズムの感情の温床を生み出してきた⁽³⁵⁾」。つまり、経済体制の急激な転換がおこななかで、国内の雇用にたいする国民の不安は、「防御的ナショナリズム」への要求となり、有効な「防御策」のひとつとして移民制限論が支持されるようになった。そのことが、二〇世紀初頭においても、現代においても、「ネイティブイズム」台頭の原動力になっているというのである⁽³⁶⁾。だからこそ、「ネイ

テイヴィズムはつねに、政治的な路線を横断して右にも左にも支持者を見つけ⁽³⁷⁾。だすことができたのだという。なぜなら、「[今も昔も]アメリカ人という国民が衰退しているという深刻な懸念」が、「右翼から……政治的『穏健派』、さらには……自称リベラル」といった人々を束ねているからである⁽³⁸⁾。このようにサンチェスは、アメリカ・ナショナリズムが、社会変化にたいして防御的になり閉鎖的な傾向を強めたときに、「ネイティヴィズム」という形態をまとうのだと考えているのである。

こうしたサンチェスの立場は、移民規制を唱える一部の「リベラル」を批判的に分析する文脈において、いつそう明確にあらわれている⁽³⁹⁾。彼の分析を約言すれば、次のようになろう。

一部のビジネス・エリート階層を除き、大半のアメリカ人にとって、メキシコやキューバといった発展途上国からの移民は、アメリカの財貨を「国外に流出させる存在」(drains)であると同時に、「アメリカの経済的覇権」という夢、あるいは「ポスト冷戦時代における多文化的な未来」という夢を脅かす諸国を象徴する存在にほかならない。こうした状況が「リベラル・ナショナリズム」を生み出した。「リベラル」を標榜しながらも、移民制限や保護主義の必要を訴える、そうした新たな声は、アメリカの政治的言説のなかで「リベラル・ネイティヴィズム」が噴出しつつあることを示している⁽⁴⁰⁾。

つまり、「大半のアメリカ人」にとって、ヒスパニック移民とは、低賃金を「武器」にアメリカ人労働者から職を奪い、アメリカで稼いだ「外貨」を中南米の「母国」へと送金して、「母国」の経済力増大に寄与する「出稼ぎ労働者」にほかならない。そればかりか、彼ら移民は、「母国」独自の、「均質的」で「一体性」のある文化に強い自尊心を抱いており、「出稼ぎ先」であるアメリカでも、そうした「母国」の文化をそのまま維持し実践することに熱心である⁽⁴¹⁾。こ

うした「現実」にたいする「大半のアメリカ人」の不安と苛立ちを糧にして、「右翼」はもちろん「自称リベラル」までもが荷担する「ネイティヴィズムの再燃」がもたらされた、というのである。こうしたサンチェスの理解は、いうまでもなく、ネイティヴィズム研究の泰斗ハイアム (John Higham) に負うものである。ハイアムは、古典的研究 *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism, 1860-1925* において、「ネイティヴィズム」を「国内の少数派にたいして、その「マイノリティ」集団が外国 (すなわち、『非アメリカ的』存在) と結びついていることを理由に、激しく反発すること」と定義し、アメリカ史に繰り返し登場する「ネイティヴィズムの敵愾心」の核心部分に、「近代ナショナリズムという、「人々を」結びつけ、突き動かす力 (the connecting, energizing force of modern nationalism)」を見出した⁽⁴²⁾。ハイアムの議論を、発展的に継承しようとするサンチェスにとっても、「ネイティヴィズムという思考習慣 (nativism as a habit of mind)」は、「われわれ「アメリカ人」の国民的不安 (our national anxieties) を反映し……われわれの寛容さの限界を示」すものにほかならないのである⁽⁴³⁾。

そうした立場からすれば、ときに「ネイティヴィズム」としてあらわれるアメリカの「防御的ナショナリズム」とは、アメリカが克服すべき課題にほかならない。実際サンチェスは、論文を締めくくるにあたって、社会学者ラムボート (Ruben Rumbaut) の言葉——「自分で蒔いた種は自分で刈らねばならないというのが、ものの道理だ。あなたが誰かをコミュニティに受け入れようとするとき、あなたはその人に、自分はこの地にかかわりをもっているし、自分には存在意義があるのだ、と感じるよう促がしていることになる。しかし、もしあなたが憎しみの種を蒔くのであれば、あなたは憎しみが生み出す収穫物をかりとることになるだろう」——を引用したうえで、次のように述べている——「アメリカにやってきて社会に貢献しようとしている人々を私たちが攻撃するとき、私たちは如何なる未来を蒔いているのか。すべてのアメリカ人はいまこそ、そう自問するときなのだ⁽⁴⁴⁾」。つまり、アメリカ社会が移民にたいして敵対的姿勢で臨むことは、社会状況の無用な混乱を招かざるを得ず、アメリカにとって好ましくない結果をもたらすことになる

いのである。

サンチェスがこのように結論するにいたる大前提となっているのは、移民によってもたらされる文化的多様性こそ、アメリカを価値ある存在たらしめているものであるという、彼の確信である。サンチェスは、「ニュー・アメリカン・スタディーズ」の提唱者のひとりであり、仲間とともに共同研究の成果を *Post-Nationalist American Studies* として発表しているが、本書の編者であり第一章の執筆担当者である比較文学者ロウ (John Carlos Rowe) の次の言葉は、彼らの基本的姿勢を端的に示している——「伝統的なアメリカ研究が依存していたモデルとは、単一の支配的文化が移民たちの諸文化を、少しずつ時間をかけて発展させながら、同化してきた (*assimilating*) というものであった。しかし最近の考え方は、アメリカ合衆国を構成する、多くの異なる文化相互間で歴史的に生起してきた文化的な混雑性 (*the cultural hybridities*) が強調されている⁽⁴⁵⁾。いうまでもなく、サンチェスやロウらは、「すべてに優越するナショナルリズムの神話 (*an overarching nationalist mythology*) にこれまで従属させられてきた多様な文化」に焦点を合わせ、アメリカ国内のさまざまな「文化的・社会的アイデンティティ」のありようを強調する立場にたっている⁽⁴⁶⁾。

こうしたサンチェスらの議論は、一九九〇年代以降さかんになっている「合衆国の国是である『多からなる一』の読み直しの作業」の一環として位置づけることが可能であろう⁽⁴⁷⁾。周知のとおり、これまで、国璽に記された標語 *E pluribus unum* は、もっぱら「多からなる一」(*one out of many*) と理解され、「メルティング・ポット」というアメリカにおける国民統合のイメージをささえてきた。しかし、近年、アメリカの実際のありようからすれば、それはむしろ「一の中の多数」(*many in one*) と読み替えるべきではないか、と問題提起する声が高まっている⁽⁴⁸⁾。管見のかぎり、サンチェスは、標語の再解釈について直接論じてはいないが、彼が「多文化的」あるいは「多人種的」な国民のありように強い関心を寄せていることは明らかであり、その意味において、サンチェスの政治的志向は「一の中の多数」にあると評しても、あながち間違いではあるまい。サンチェスは、アメリカ人のアイデンティティを、より多元的なもの

として解釈し直そうとしているのである。

このようにサンチェスらは、アイデンティティや文化の多元的なありようが意識され、認知されることの有益性を強調する。その有益性は、実は、「ネイティブイズムの再燃」の、いわば立役者である人々も必ずしも否定していない。たとえばハンチントンは、「アメリカが成し遂げた……最大の功績は、アメリカが、人間は（エスニシティや人種ではなく）その人個人の真価によって評価されるべきだとする、多民族、多人種の社会になったことだ」と断言している⁵⁰。では、ハンチントンやブリメローらは何を問題視しているのか。彼らの危惧は、シュレジンガー二世の次の言葉に端的にあらわれている——「われわれの社会における結合の絆 (the bonds of cohesion) はかなり脆弱……であるので、文化的および言語的な分離〔状態〕を推奨することによって、その絆を〔さらに〕ひずませることには、何の意味もない。アメリカ人のアイデンティティは、決して固定的なものでも最終的なものでもなく、つねに形成の過程にあるというべきだろう。人口構成における変化は、つねに国民的気質 (national ethos) の変化をもたらしてきたのであり、その過程は今後も続くであろう。しかし、それが国民的統合の犠牲においてなされないよう、われわれは望まざるをえない。アメリカが多元的社会 (a pluralistic society) として直面している問題は、この共和国を団結させる結合の絆を断ち切ることなしに、これまで大事にしてきた諸文化や諸伝統の正当性をどのようにして立証するかということである。われわれの課題は、この国民の偉大な多様性についての正当な評価と、個人の自由、政治的民主主義、および人権という西欧の偉大な統一化の思想にたいする正当な重視とを組み合わせることである⁵¹」。

以上明らかのように、シュレジンガー二世が恐れているのは、「多様性」が増すことではない。彼の危惧は、標語 *pluribus unum* に謳われた *unum* (一^{いつ}) という大前提が失われ、マイノリティ集団・エスニック集団が何のつながりもないまま「無数」に存在する状態なのである。たしかに、*multi-* (多) という状態は、それを束ねる主体や場があつてはじめて成立するものである。たとえば、「多文化的な」(*multi-cultural*) 社会は「さまざまな文化集団がひとつの社

会を構成する」〔傍点筆者〕ことよって活気づくのであり、複数の構成要素をつなぎ合わせる何かがなければ、特性を失ってしまうであろう。⁽⁵²⁾つまり、シュレジンガー二世らは、アメリカが「多」を成立させうる単一の場 *unum* ではなくなりつつあるのではないかということに危惧しているのである。彼らにとって最大の課題は、「多」と「一」が均衡した状態を保つことにある。だからこそ彼らは、「多」に比重がかかりすぎた現状を「是正」するため、「多」を「二」として保つ「結合の絆」を再確立しなければならないと主張するのである。

このように、ハンチントンやシュレジンガー二世らを駆り立てているのは、国民の「分裂」への深刻な憂慮と、「結合の絆」への強い欲求である。彼らの危惧は、「多様性」を担保する枠組が揺らいでいることであって、「多様性」そのものにたいするものではない。一方、サンチェスらの立場からすれば、現代の「ネイティヴィスト」がみせる、「単一の支配的文化」に固執して、アメリカ国民の特質である「多様性」を抑制しようとする態度は、アメリカを「マツカシーの時代へと逆戻り」させかねないほどの、危険な徴候にほかならない。⁽⁵³⁾双方の危機感の相違は、いうまでもなく、「多」と「一」を両立させるアメリカ人のアイデンティティとは、どうあるべきかについての見解の違いに由来しており、そうしたアメリカ人像の相違が、「移民問題」にたいする態度の違いを生み出しているのである。

既に述べたように、サンチェスの見るところでは、「ネイティヴィズムの敵愾心」と「近代ナショナリズム」は、社会変化の「原因」である『非アメリカ的存在』の排斥という点において結びついていた。換言すれば、「ネイティヴィスト」は、アメリカの「多様性」を増大させる「アイデンティティ集団」に存在意義を認めないことよって、「単一の支配的文化」に立脚した「伝統的」な「ナショナル・アイデンティティ」の再強化をはかろうとしているのであった。では他方、「ネイティヴィスト」と非難されている側は、みずからの主張とナショナリズムとの関係を、どのように位置づけているのであろうか。彼らは、果たして本当に、移民を規制することでアメリカ社会の変化を回避するという、消極的な目的しか抱いていないのだろうか。それとも、「国民統合」にむけた、何らかの建設的な視座をもつ

ているのであろうか。

四節 「統合」への視座——ナショナルリズムとしてのネイティヴィズム

サンチェスが、現代における「ネイティヴィズム」牽引者のひとりとしてあげたブリメローは、著書 *Alien Nation: Common Sense about America's Immigration Disaster* の冒頭で、ネイティヴィズムについて項を設けて、以下のように論じている。一部、重複する箇所もあるが、ブリメローの言わんとするところを理解するには前後の文脈が重要であるので、ここで改めて彼の主張を引用しておこう。

〔ネイティヴィストの祖ともいべき〕ノー・ナッシング党は、決して無知な暴徒 (an ignorant mob) の集まりではなかった。熱狂的移民ファンは、彼らの俗称 [Know Nothings 何も知らない] を解釈しそこねているためか、そのように考えがちではあるが。……ノー・ナッシング党は、実際には、移民を制限せよと主張したわけではない。ノー・ナッシング党のマサチューセッツ代表ガードナー (Henry J. Gardner) によれば、アメリカ人は、新しい移民を「帰化させるまえに、国民化すること」に気を払わねばならなかった。「その意味において」ノー・ナッシング党員は、反ユダヤ主義者とは違ったのだ。……「一九世紀の」ネイティヴィストは、けっしてナチス。「のような人々」ではなかった。彼らは、文化的意味においても、政治的意味においても、ナシヨナリストだったのだ。ネイティヴィストによれば、アメリカのナシヨナル・アイデンティティは、……ケネディ大統領がのちに「自由を守りぬくこと」(the survival and success of liberty [sic]) と呼ぶことになるものと、密接不可分な関係にあった。ノー・ナッシング党員が抱いていた「二つの憂慮、すなわち」移民についての憂慮と、奴隷制度「の存続」につい

ての憂慮は、同じコインの裏表だったのだ。……つけくわえていえば、ノー・ナッシングは大きな財産を残している。世俗の公立学校というアメリカ的システムである。これもまた、移民を「国民化すること」(“nationalizing”)への関心から、彼らが取り組んだことであつた。⁵⁴⁾

ブリメローの解釈によれば、「ネイティヴィスト」の根本的な問題関心は、移民の入国を妨げたり、移民を国外に追い出したりすることではなく、移民を「国民化すること」にあつた。つまりブリメローは、「ネイティヴィスト」による移民問題への関与は、国民統合への関心に起因すると示唆しているのであり、「公教育」への取り組みも、移民の「国民化」を重視する態度のあらわれであると述べているのである。こうしたブリメローの理解は、サンチェスやハイアムの提示する見解、すなわち、移民の惹起する社会変化を恐れる、「外国人嫌い」の「ネイティヴィスト」という理解とは、やや趣をことにしている。ブリメローが「ネイティヴィストはナショナリストである」と評価するとき、あるいは、「ネイティヴィズム」と「国民化」、そして「公教育」とをひとくくりの問題として語るとき、彼が想定しているナショナリズムを、どのようなものとして理解すればよいのだろうか。「移民を『国民化すること』」とは、具体的にどのような処遇することであると、彼は考えているのだろうか。

この問題を考えるうえで、ナショナリズムのもつ国民統合の機能に注目したユルゲンスマイヤー (Mark Juergens-meyer) の議論が示唆するところは、極めて有用である。彼は、著書 *The New Cold War?: Religious Nationalism Confronts the Secular State* (邦訳『ナショナリズムの世俗性と宗教性』)において、アンダーソン (Benedict Anderson) らの議論を援用しつつ、次のように論じている——「ナショナリズムという思考枠組 (frameworks of thought) は……日常世界の下位に、見えないものにも首尾一貫性を与える意味の次元が存在していることを示唆 [し] ……社会的政治的秩序に存在意義を与える権威をもたらず。そうすることによって、ナショナリズムは、個人が、

世界のうちに存在する正しいあり方を定め、個々人を社会全体に関係づける。それは、個人を世界のうちに位置づけ……個々の人間を、固有の場所および固有の歴史をとまなう、より大きな集合体 (collectivity) に結びつけるのである⁽⁵⁵⁾。こうした議論を踏まえて、ユルゲンスマイヤーはナショナリズムを「秩序のイデオロギー」(an ideology of order) と定義する。彼がここであえて「秩序」という表現を用いているのは、ナショナリズムが、「共同体感覚」(a sense of community) をもとめる人間の内在的欲求を満たすと同時に、生殺与奪の権力を独占する権威への服従を包含する、二面性をもつことを強調するためである。⁽⁵⁶⁾

約言すれば、ユルゲンスマイヤーのいうナショナリズムとは、社会における個々人の正しいあり方とはどういうものなのかを提示し、個々人を社会全体のなかに位置づける力といえよう。人々は、そうした社会的配置のなかで、みずからに与えられた行動律の存在を意識し、それに従えば社会の一員として認められるであろうことを、逆に、それを犯せば社会の安寧を脅かす者として罰せられるであろうことを、感知するのである。

このようにユルゲンスマイヤーは、個々の人間を国民という「大きな集合体」に結びつけて秩序をうみだすという点に、ナショナリズムの本質を見出している。この点を踏まえ、改めて、ブリメローの主張を読み直してみたい。ブリメローによれば、「ネイティヴィスト」とは、アメリカの「ナショナル・アイデンティティ」を、「自由を守りぬくこと」と密接不可分なものにとらえ、そうしたアイデンティティのありようを社会全体で共有するために、「公教育」を通じて移民を「国民化する」必要があると考えた人々であった。そうであるとすれば、「ネイティヴィスト」は、「自由」を、アメリカを基礎づける価値とみなし、みずからは、この価値意識を十全に身につけていると自己認識していたということになる。その確信において、「ネイティヴィスト」は、アメリカの正しい社会的配置のうちに、正しい場を与えられており、さらに、その当然の結果として、秩序を創出し維持するという、重大な責任を課されていたのである。むしろ、「自由」という価値意識を習得することは、どこで生まれたとしても可能である。だからこそ「ネイティヴィスト」

は、移民にたいして、「帰化」によって法的諸権利を付与するまえに、まず、アメリカ社会における彼らの正しいあり方と守るべき行動律を教え込まねばならないと考えたのである。つまり移民を「国民化すること」が必要だったのだ。

「ネイティヴィスト」は、アメリカの社会的配置を維持するために、配置の外にいる人間を、配置の内に組み込み、秩序を創出しようとした。敷衍すれば、「ネイティヴィスト」は、渡米前の出自に囚われている移民を、その拘束から解き放ち、一・個・人・と・し・て、アメリカ国民という「大きな集合体」に帰属させようとしたのである。まさにこの点に、ブリメローは、ナショナリズムとネイティヴィズムの一致点を見出しているといえよう。

ブリメローのみるところでは、「ネイティヴィスト」は「文化的意味においても政治的意味においても」紛れもないナショナリストであった。本稿の冒頭で紹介した「ネイティヴィスト」には、「移民を国民化することに」熱心すぎるどころがあったのかもしれない。だからといって、その系譜をひく現代のネイティヴィストたちが、先人のおこないを恥じる必要はまったくないのだ⁵⁷というブリメローの言は、その背後に、そのような「ネイティヴィスト」像があったと考えれば、理解できるのである⁵⁸。

以上を踏まえると、ブリメローやハンチントン、あるいはシュレジンガー二世という「ナショナリスト」を自称する人物が、いかなる視点からヒスパニックをめぐる「問題」を論じているのかは、より理解しやすくなる。彼らは、みずからの考える、アメリカの「秩序」を語り、それを維持しうる社会的配置のありようを提示しているのだ。ユルゲンスマイヤーの議論を前提とすれば、ブリメローらの議論を次のように読み解くことができよう――

アメリカの秩序は、人々が、この社会的配置内の存在として、各人に課された行動律に則った振る舞いをするこゝで成立する。換言すれば、行動律を理解していない者や、あえてそれを犯す者を放置すれば、秩序は創出されえないのである。ヒスパニックが、アメリカの社会的枠組のうちで、みずから固有の文化的出自を謳歌しているので

あれば、問題はない。しかし、彼らは、ヒスパニックであることを第一義ととらえている。つまり、彼らにとっての「固有の場所および固有の歴史をともなう、より大きな集合体」とは、アメリカ国民ではなく、あくまでヒスパニックというエスニック集団なのである。こうした姿勢は、「多様性」を保障するアメリカの秩序それ自体を揺るがしている。アメリカは、「見えないものに首尾一貫性を与える意味の次元」を失いつつあり、社会はエスニック集団の寄せ集めへと「断片化」しつつある。ヒスパニックの姿勢が変わらないかぎり、アメリカという「日常世界」は崩壊を免れない。

むすびにかえて

以上に述べたように、論争のなかで用いられている「ネイティヴィズム」という用語は、ふたつの相反する価値づけを施されている。ひとつは、ヒスパニック移民の流入を危惧する議論を、批判する表現としての「ネイティヴィズム」である。アメリカの文化的豊穡さの源泉を国民の「多様性」ととらえる論者にとって、現代に「再燃」した「移民警戒論」は、打破すべきアナクロニズムである。この文脈における「ネイティヴィズム」は、「多文化国家アメリカのステイグマ」にほかならない。もうひとつは、「ヒスパニック・パワー」の台頭によって「深刻化」するアメリカ国民の間の「断層」を解消するための、ひとつの方策としての「ネイティヴィズム」である。「結合の絆」の「消失」を憂える論者にとって、ヒスパニック移民を、ヒスパニックという「エスニック集団」から掬いあげ、一個人としてアメリカの正当な社会的関係のうちに取り込み、アメリカが「日常世界」としての地位を回復することは、火急の課題である。こうした、ふたつの「ネイティヴィズム」理解は、根本的には、アメリカ人のアイデンティティが「動揺」している今日において、いかにしてそれを再構成するか、その方法論についてのそれぞれの立場を反映したものであった。サン

チェスらによれば、「単一の支配的文化」を前提とする従来の「ナショナル・アイデンティティ」理解は、「集团的アイデンティティ」を意識的・無意識的に差別し抑圧することで、成り立ってきた。しかしいまや、アメリカ人のアイデンティティは見直しを迫られており、国民の実態にてらして、より多元的なものとして、再構成される必要がある。こうした見解を支えているのは、アメリカ国民を、さまざまな「集団」からなる集合体としてとらえようとする、「多文化主義」の議論であろう。一方、シュレジンガー二世らによれば、アメリカ国民の「多様性」はもちろん認められねばならないが、「多様性」の維持が自己目的化すれば、アメリカ国民は「分裂」し「断片化」せざるをえないという。それを回避するためには、「ナショナル・アイデンティティ」が「集团的アイデンティティ」に優越するものであることを、改めて確認する必要がある。それというのも、アメリカ国民は、あくまで、「自由」「平等」といったアメリカの政治的・理念的を共有する「個人」によって形成される集合体だからである。

そうであるとすれば、「ネイティヴィズムの再燃」をめぐる論争に関していえば、そこで根源的に争われているのは、古矢のいうような「文化資本のみならず経済資本……そしてそれらの資本の配分にあずかる政治権力」ではない、と言うべきであろう。「ネイティヴィズム」に相反する価値づけをする人々は、双方とも、「ネイティヴィズム」を、アメリカ史において断続的に繰り返かえされる政治社会現象と位置づけ、アメリカという国民国家の存続やアメリカ人の心性に関わる問題として考察している。その点に鑑みれば、古矢の図式では、論争の射程を、過小評価することになりかねない。論者たちは、アメリカ人のアイデンティティとはどうあるべきかについて、異なる意見をもっているものであり、さらにいえば、「多文化国家アメリカ」において「二」なるものをどうやって構築するのかについて、異なる考えをもっているのである。換言すれば、アメリカにおける国民統合の単位として、「人種」や「エスニック」といった「集団」を認めるのか、あるいは、あくまで「個人」を単位とするのかについて、争っているといえよう。

アメリカ人のアイデンティティ論として、将来的にどちらがより多くの支持を集めることになるのかについては、容

易には判断しがたい。ただ、今日における問題は、アメリカ国民のアイデンティティや文化の「多様性」を強調してきたハイアムが、一九九七年には次のような危惧の念を表明せざるをえないことに、端的にあらわれている——「ここ三〇年間のあいだに、国民形成 (nation-building) というテーマは、歴史研究者のあいだでは姿を消してしまった……民族的、人種的、個別的な忠誠心 (loyalties) をどう確立するかという問題と同じくらい、国民的で普遍的な忠誠心をどう確立するかという問題を、われわれは真剣に考えてみる必要がある⁽⁵⁹⁾」。つまり、「多文化主義」は、「多様性」を担保する枠組について、十分考察してこなかったというのである。たしかに「多文化主義」の議論においては、「集団的アイデンティティ」の意義が強調されるあまり、それぞれの「個性的」な集団を包含する全体についての配慮は、相対的にみて乏しかったといえるだろう。そのことが、ヒスパニック移民の流入を危惧する諸議論を喚起し、それになりたい世論の少なからぬ支持をうむ一因となっていることは、想像するに難くない。

以上、現代における「ネイティブイズムの再燃」をめぐる議論状況を整理し、「ネイティブイズム」という表現が包摂するふたつの概念を確認するという本稿の目的にかんしては、一応の結論はみた。それぞれのネイティブイズム理解の妥当性、そしてそれぞれが包含するアメリカ人像の将来性にかんしては、現時点では不明であり、今後の社会状況を注視しながら、慎重に判断しなければならない。そうした作業とは別に、歴史概念としてのネイティブイズムを再考する必要があるだろう。現代におけるネイティブイズム理解の相違が、一九世紀のノー・ナッシング台頭や、二〇世紀初頭のクー・クラックス・クラン (Ku Klux Klan) 勃興をどのように理解するかという歴史認識の相違に対応したものであることを考えれば、歴史概念としてのそれを精緻化することは不可欠だからである。最初に取り組むべきは、ネイティブイズム自身の言論を丁寧な追い、分析することである。これは、現在のアメリカを考えなおすための基礎的作業でもある。紙幅の制約上、考察は別の機会に譲ることにする。

- (1) ここでいう「ヒスパニック」は、行政管理予算局 (Office of Management and Budget, OMB) の定義にしたがっている。行政管理予算局 (OMB) によれば、「ヒスパニック」もしくは「ラティーノ」とは、「人種に関係なく、キューバや、メキシコ、プエルト・リコ、南アメリカ、中央アメリカ、あるいはそのほかのスペインの文化や出自 (origin) をもつ人々」のことを指す用語である。詳しくは以下を参照のこと。U.S. Census Bureau, *Overview of Race and Hispanic Origin: 2000: Census 2000 Brief*, p.10. <http://www.census.gov/prod/2001pubs/c2kbr01-1.pdf>
- (2) 二〇〇〇年のセンサスによれば、総人口にしめるヒスパニックの割合は、二一・五パーセントに達し、「黒人」(Black or African American) の二一・一パーセントをわずかではあるが上まわる結果となった。ただし、厳密に言えば、センサスにおいて「黒人」は人種概念であるのたいていして、「ヒスパニック」はそうではないため、この数字をもって単純に、「ヒスパニック人口」が「黒人人口」を上まわった、と結論づけることはできない。cf. *ibid.*
- (3) さきにおこなわれた大統領選挙の選挙活動においては、民主・共和両党とも、スペイン語のテレビ・コマーシャルを作成し、ケリー、ブッシュ両大統領候補には、スペイン語で演説をおこなわせるなど、ヒスパニックの取り込みに必死であった。また、さまざまな企業も、マーケットとしてのヒスパニックに注目しており、スペイン語での広告や、彼らの嗜好にあわせた商品開発なども盛んである。
- (4) *New York Times*, 3 Oct. 1997.
- (5) Peter Brimelow, *Alien Nation: Common Sense about America's Immigration Disaster* (New York, Harper Perennial, 1995), p.12.
- (6) *ibid.*, p.13.
- (7) たとえば、nativism を「排外主義」と邦訳する古矢旬によれば、それは「一九世紀アメリカニズムに内在する排除の論理」であり、「二〇世紀の前半の五〇年……の間に、過激な排外主義は周辺化され」たという。彼はまた「近年、アメリカの民族的多元性が確認されるのに伴い、排外主義の影響力も漸減しつつある」とも述べている。こうした古矢の理解にしがえば、ネイティヴィズムとは、移民のもたらす「民族的多元性」を否定する思想であり、そうした思想にささえられた運動ということになる。彼が、「排外主義」の顕著な事例として、反黒人・反ユダヤ人を標榜するクー・クラックス・クラン (Ku Klux Klan) をあげ、同団体が勢力をふるった一九二〇年代を説明するにさいして、「非和解的『民族対立』さらには『民族浄化』」が現実化する可能性もあった時代と述べていることからしても、古矢は、ネイティヴィズムを、「多様性」や「多元性」と相容れない思想としてとらえているように思われる。こうした解釈は、たしかに、本文で引用した *New York Times* 紙の記事を理解するには有効なのであるが、ブリメローの議論を読み解くうえでは、不十分といわざるをえない。古矢のネイティヴィズム理解に関しては、古矢旬『アメ

リカニズム——「普遍国家」のナショナルリズム』（東京大学出版会、二〇〇二年）「第一章アメリカニズム」、また彼が「排外主義」の項目の執筆を担当した斎藤真・金関寿夫・亀井俊介・岡田泰男監修『アメリカを知る事典』（平凡社、一九九四年）を参照のこと。

(8) 古矢、前掲書、二〇五頁。古矢は、もう一つの要因として、「集団間関係の社会文化的な状況」をあげている。

(9) こうした議論状況については、遠藤泰生「多文化主義とアメリカの過去」油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ——揺らぐナショナル・アイデンティティ』（東京大学出版会、一九九九年）を参照のこと。この論文において、遠藤は、思想史家ホリンジャー (David A. Hollinger) の多元論、すなわち、アメリカを、「脱エスニック」(postethnic) で、多層的なアイデンティティをもつ人間によって構築される社会としてとらえようとする議論を紹介している。ただし、のちに言及するサンチェスは、ホリンジャーの議論を、白人を中心とする「人種のかつ階級的ヒエラルキー」を固定化させているに過ぎないとして、痛烈に批判している。ホリンジャーにたいするサンチェスの批判に関しては、cf. George J. Sánchez, 'Creating the Multicultural Nation: Adventures in Post-Nationalist American Studies in the 1990s,' John Carlos Rowe, ed., *Post-Nationalist American Studies* (Berkeley, University of California Press, 2000), pp.53-54.

(10) アメリカにおける多文化主義論争の社会的背景については、油井大三郎が『多文化主義のアメリカ』に寄せた序文にも、簡潔にまとめられている。油井大三郎「いま、なぜ多文化主義論争なのか」油井・遠藤編、前掲書、三二七頁。

(11) Jack Citrin, Ernst B. Haas, Christopher C. Muste, Beth Reingold, 'Is American Nationalism Changing? Implications for Foreign Policy,' *International Studies Quarterly*, 38 (March 1994), pp.3-5.

(12) もっとも象徴的なのは、一九六三年にマーティン・ルーサー・キング (Martin Luther King) のおこなった名高い演説「私は夢がある」であろう。笹田直人・堀真理子・外岡尚美編『概説アメリカ文化史』（ミネルヴァ書房、二〇〇二年）、九頁。

(13) 森茂岳雄「アメリカの歴史教育における国民統合と多文化主義」油井・遠藤編、前掲書、一七〇頁。

(14) 古矢、前掲書、一八三頁。

(15) 古矢、前掲書、一九三頁。

(16) 州民投票の結果は、cf., P. J. McDonnell, 'Prop. 187 Win Spotlight Voting Disparity,' *Los Angeles Times*, 10 Nov. 1994. また、二〇〇四年には、メキシコと国境を接するアリゾナ州において、非合法移民への公共サービス停止を内容とする法律を制定しようという動きが盛り上がり、これをみせたため、「帰ってきた住民提案一八七」(Proposition 187 redux) として話題になった。

Tamar Jacoby, 'Anti-Immigrant Fever in Arizona: A ballot initiative there recalls California's traumatic Prop. 187 fight,' *Los Angeles Times*, 12 July. 2004.

- (17) Brimelow, *ibid.*, p. xix.
- (18) フリメローの政策提言に関しては cf. *ibid.*, Ch.14.
- (19) Patrick J. Buchanan, *The Death of the West: How Dying Populations and Immigrant Invasions Imperil Our Country and Civilization* (New York, Thomas Dunn Books, 2002), p.3. [宮崎哲哉監訳『病むアメリカ、滅びゆく西洋』（成甲書房、二〇〇二年）、一八頁] 以下、欧語著作・論文で邦訳があるものを訳出するにあたっては、邦訳を参考にしつつ、必要と思われる箇所に関しては、適宜、筆者が訳を改めている。
- (20) Buchanan, *ibid.*, ch.6. [邦訳、第六章]。第六章「国土回復運動」(La Reconquista)の冒頭には、「メキシコの新聞 *Excelsior* 紙の言葉——「アメリカ南西部は、一発の銃弾も放たれることなく、再びメキシコの支配圏となりつつある」が引用されている。ブキャナンは、テキサス併合（一八四五年）と、グアダルペ・イダルゴ条約（一八四八年）によってアメリカ領土となった南西部において、メキシコ系移民の影響力が高まっていることをさして、「メキシコ人による「国土回復運動」と表現しているのである。」
- (21) Arthur M. Schlesinger, Jr., *The Disuniting of America: Reflections on a Multicultural Society*, Revised and Enlarged Edition (New York, W.W.Norton & Company, 1998) [都留重人監訳『アメリカの分裂——多元文化社会についての所見』（岩波書店、一九九二年）]。ただし、邦訳は「Whittle Direct Books から一九九一年に出版された初版を底本としている。」
- (22) Samuel P. Huntington, *Who Are We?: The Challenges to America's National Identity* (New York, Simon & Schuster, 2004), p. xvi. [鈴木主税訳「分断されるアメリカ——ナショナル・アイデンティティの危機』（集英社、二〇〇四年）一三頁]
- (23) 邦訳の副題は、「ナショナル・アイデンティティの危機」と意識されている。
- (24) Huntington, *ibid.*, p. xv. [邦訳、一一頁]
- (25) *ibid.*, p. 62. [邦訳、九六頁]
- (26) *ibid.*, p. 37. [邦訳、六三頁]
- (27) *ibid.*, pp. 337-339. [邦訳、四六七-四六九頁]
- (28) *ibid.*, p. 221. [邦訳、三〇九頁]
- (29) *ibid.*, pp. 142. [邦訳、二〇三-二〇四頁]
- (30) *ibid.*, pp. 365-366. [邦訳、五〇五頁]
- (31) Michiko Kakutani, 'Books of the Times: An Identity Crisis for Norman Rockwell America.' *New York Times*, 28 May, 2004.
- (32) Anton Chaitkin, 'Book Review: What Do You Mean, "We"?' *Executive Intelligence Review*, 21 May, 2004.

- (33) 既述のように、プリメローは、移民を議論の対象にただで移民差別論者として非難されると、憤りを露わにしている。ブキャナンも、「政治的公正の号令により、移民問題は口にしてはいけない」ことになっており、「これほど異なる人種、文化、文明を受け入れている国は世界中でアメリカだけだなどと言うやつは『ネイティヴィスト』か『外人嫌い』と頭ごなしに決めつけられてしまうと不平を述べている。Buchanan, *ibid.*, p.133. [邦訳、一八二頁]
- (34) George J. Sanchez, 'Face the Nation: Race, Immigration, and the Rise of Nativism in Late Twentieth Century America,' *International Migration Review*, 31-4 (1997), p.1013. [村田勝幸訳「ネイションの相貌——人種、移民、二〇世紀末アメリカにおけるネイティヴィズムの台頭』『思想』九三二(岩波書店、二〇〇一年一月)、三八—三九頁]
- (35) *ibid.*, p.1021. [邦訳、四八頁]
- (36) 'Face the Nation'におけるサンチェスの考察の力点は、今日のアメリカにおいて、「新たな人種主義」と、「新来の移民にたいする伝統的な敵意」であるネイティヴィズムとが、いかに「絡み合っている」(*intertwine*)のかを説き明かし、現代のネイティヴィズムを「人種化されたネイティヴィズム」(*racialized nativism*)と位置づけ、その特質を明らかにすることにある。
ibid., p.1009.
- (37) *ibid.*, p.1021.
- (38) *ibid.*
- (39) そうした「リベラル」を代表する人物として、サンチェスが本論文のなかで言及しているのは、ジャーナリストであり、シンクタンク「ニューアメリカン・センチュリー財団」(*New American Century Foundation*)の主任研究員でもあるリンド(Michael Lind)だけである。しかし、本論文を邦訳した村田が「訳者解題」において名前をあげているように、サンチェスが、批判すべき「リベラル」のひとりとして、シュレジンガー二世の存在を念頭においていることは間違いない。実際、下記の論文ではシュレジンガー二世の言論を批判的に分析している。cf. Sanchez, 'Creating the Multicultural Nation.'
- (40) Sanchez, 'Face the Nation', pp.1024-1025. [邦訳、五〇—五二頁]
- (41) ヒスパニック移民と、彼らの「送り出し国」との密接な関係を指摘するのは、「自称リベラル」だけではない。註20で触れたように、「保守派」であるブキャナンも、アメリカ南西部におけるヒスパニック移民の急増を、「国土回復運動」と表現し、移民と外国(メキシコ)とのつながりを危惧している。
- (42) ハイアムは、著書 *Strangers in the Land* の冒頭で、執筆の目的を次のように説明している——「本書は〔ネイティヴィストという〕変わり者たち (*crackpots*) に関するものではない。確かに、〔ネイティヴィズム運動のなかに〕変わり者たちは含まれてはいたけれども。本書で論じているのはアメリカの人々なのである。ネイティヴィズムという思考習慣 (*nativism as a habit of*

mind) は、アメリカの過去が描いた、いくつかの大きなうねり (some of the large contours of the American past) を陰鬱に照らし出す。それは、われわれ「アメリカ人」の国民的不安 (our national anxieties) を反映したものであり、われわれの寛容さの限界を示したものである。つまりハイアムは、ネイティヴィズムを、「よそ者」(strangers) をやみくもに嫌悪する、一部の「変わり者」による運動としてとらえるのではなく、時に「よそ者」の存在に過敏にならざるをえないという、アメリカ特有の社会現象としてとらえるのである。こうした前提にたつて、彼は、ネイティヴィズムを本文中の引用のように定義し、次のように述べた——「ネイティヴィズムの敵愾心の具体的なありようは、少数派があたえる刺激の性質 (character of minority irritants) や時代状況に応じて、大きく変動しうるし、事実変動している。しかし、それぞれ個別の敵意を貫いて、近代ナショナリズムという「人々を」結びつけ、突き動かす力が流れている。実にさまざまの文化的嫌悪感やエスノセントリズムに依拠しながら、ネイティヴィズムは、そうした反感を、アメリカ的生活様式にたいする敵を滅ぼそうという熱情へと、転換するのである」。このようにハイアムは、ネイティヴィズムとして表出する「外国人嫌い」(anti-foreign spirit) の核心部分に、「近代ナショナリズム」の存在を見出すのである。John Higham, *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism, 1860-1925*, Second Edition (New Brunswick, Rutgers University Press, 1998), p.4.

(43) サンチェスによる「ハイアムへの言及は、Sanchez, 'Face the Nation', pp.1018-1019. [邦訳' 四四-四六頁]

(44) *ibid.*, p.1027. [邦訳' 五五頁]

(45) John Carlos Rowe, 'Post Nationalism, Globalism, and the New American Studies.' Rowe, ed., *ibid.*, pp.23-24. [本橋哲也訳「ナショナリズム以後のアメリカ研究」『思想』九三八 (岩波書店' 二〇〇二年六月)' 一四七頁]

(46) *ibid.*, p.23. [邦訳' 一四七頁]

(47) 遠藤泰生は、前掲論文「多文化主義とアメリカの過去」(油井・遠藤編、前掲書)において、標語の読み直し作業の例として、思想史家ホリンジャーの多元論を紹介している。

(48) cf., Michael Walzer, *What It Means To Be An American* (New York, Marsilio, 1992). 特に所収のエッセイ 'What Does it Mean to Be An "American"' を参照。

(49) Sanchez, 'Face the Nation', pp.1016-1017. [邦訳' 四一-四三頁] もしくは Sanchez, 'Creating the Multicultural Nation' を参照のこと。

(50) Huntington, *ibid.*, pp.xvii. [邦訳' 一四-一五頁] あるいは Schlesinger Jr., *ibid.*, p.20. [邦訳' 八-九頁] も参照のこと。

(51) Schlesinger Jr., *ibid.*, p.147. [邦訳' 一七九頁]

(52) multi-cultural のほかにも「学際的な」(multidisciplinary) 視角は「多くの学問的アプローチ・分野・方法を組み合わせる」

ことよって生じ、「多機能な」(multifunction) 道具は「数多くの機能をあわせ持つ」ことよって重用されるのである。各項目の説明は、*Oxford English Dictionary* より引用。

(53) 現代の「ネイティブイスト」の企図が、究極的には、白人男性を中心とする既存のヒエラルキーを維持することにあるというサンチェスの指摘は非常に鋭いものであり、「ネイティブイスト」の言説がはらむ権力性には十分注意を払う必要がある。サンチェスは、「白か黒かの二分法」(the white-black paradigm of race) という概念を提起し、白人の人種主義はもちろんのこと、アフリカ系アメリカ人による人種主義批判が、逆説的にも、現代の「人種主義的ネイティブイスト」の台頭を招いていると批判している。cf., Sánchez, 'Face the Nation', p.1025. [邦訳、五二頁]

(54) Brimelow, *ibid.*, pp.12-13.

(55) Mark Juergensmeyer, *The New Cold War?: Religious Nationalism Confronts the Secular State* (Berkeley, University of California Press, 1993), p.31. [阿部美哉訳『ナショナリズムの世俗性と宗教性』(玉川大学出版部、一九九五年)、四七頁] ユルゲンスマイヤーは、アンダーソンのほかに、ギーマツ(Clifford Geertz) やギデンズ(Anthony Giddens) らの議論にのっとり、みずからのナショナリズム概念をつくりあげている。

(56) *ibid.*, pp.31-32. [邦訳、四八頁]

(57) Brimelow, *ibid.*, p.13. ブリメローの言うとおり、ノー・ナッシングは反奴隷制の立場をとっていた。この点は、もっと注目されてしかるべきであろう。

(58) もちろん、ブリメローの解釈がどれほど正鵠を得たものであるのかについては、独自に詳細な分析と検討を加え、判断をくだす必要がある。移民を「国民化すること」とはいつても、ネイティブイストの企図が、自分たちと寸分たがわぬ資格をもつ「国民」として移民を受け入れることだったのか、あるいは、移民をいわば「準国民」や「二流市民」として既存の権力関係のうちに取り込むことであつたのかは、注意深く識別されねばならない。さらに、ブリメローは「(ネイティブイストの祖とでもいうべき)ノー・ナッシング党は、決して無知な暴徒の集まりではなかった」と述べているが、ネイティブイストの歴史には、つねに、移民に向けられた暴力という側面があることは紛れもない事実であり、その点は決して看過すべきではない。

(59) John Higham, 'History in the Culture Wars', *Organization of American Historians Newsletter*, May 1997, quoted in Schlesinger Jr., *ibid.*, p.141. (邦訳は、一九九一年に出版された初版を底本としているため、該当箇所はない)。ハイアムがこうした危惧を表明したのは、一九九七年が初めてではない。一九九三年に著書 *Send These to Me: Immigrants in Urban America* の邦訳『自由の女神のもとへ』が出版されるにあたって、彼は「日本語版への覚え書き」を寄せているが、そこでも、「多様性」と同時に、「国民統合」の問題を考察する必要があると主張している。斎藤眞・阿部齊・古矢旬訳『自由の女神のもとへ——移民とエ